朧月夜

ごろー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
朧月夜

【Ｎコード】
Ｎ７７１４Ｏ

【作者名】
ごろー

【あらすじ】
其の店は、とある学園都市の寂れた商店街の、其のまた寂れた路地裏にひっそりと建っている。ようこそ、アンティークと珈琲の店、朧月夜（おぼろづくよ）へ。店主はしがない陰陽師、店員はありふれた大学生。

但し、其れは今だけのこと。

第零話　設定、このお話を読む前に

○あらすじ

神山学園、龍泉学園、その他モロモロの学校が集まる学園都市『？原市』近辺で起こる霊的かもしれない事情を主人公達が解決したり、引っ掻き回したり、取り敢えずほのぼのするお話。

○主要人物

＊藤堂（とうどう）　素也（もとや）：喫茶店兼祓い屋『朧月夜』の店長。陰陽師。何だかんだでよく分からない人。シロちゃん。

＊赤塚（あかつか）　浬（かいり）：『朧月夜』のアルバイト。神山学園大学理学部二回生。藤堂の良き理解者。クールバカ。

＊青井（あおい）　涼遥（すずはる）：神山学園大学社会学部助教。若干暴走癖がある。浬とはウマが合う様子。『朧月夜』の常連客。

＊乾（いぬい）　玄也（げんや）：神山学園大学社会学部院生。青井のストッパー。『朧月夜』の常連客。クロちゃん。

＊切咲（きりさき）　佑夜（ゆうや）：神山学園大学社会学部教授。ついでに田賀町にある『終日神社（ひねもす）』の神職。乙三（オッサン）。

＊辻北（つじきた）　御拠（みより）：左隣『辻喜多道具店』の一人娘。神山学園大学社会学部二回生。そこそこミーハー。

＊市野原（しのはら）　哉灯（ちかほ）：右隣『際念寺』の長男。上に姉（家出済）あり。神山学園大学文学部二回生。御拠の幼馴染。

第壱話　春をたづね行くは

其の店は、とある学園都市の寂れた商店街の、そのまた寂れた路地裏にただひっそりと建っている。ガラクタ手前の古道具が、所狭しと置いてある骨董屋の右隣。さして有名でもない、小さな寺の左隣。そこには、明らかに周りとそぐわない西洋風の建物ーどうやら喫茶店らしいーがあった。

店の名は、朧月夜。辺りには珈琲を挽く薫りがほんのり漂い、少し曇った窓硝子の向こうには、マイセンやらの磁器や、銀食器（シルバー）などが整然と置かれている。然し、ただ、それだけである。店には人気がないし、営業しているのかすらも判らない。

ふう、

窓辺の椅子に座り、彼は今日何度目かの溜息を吐いた。？身に黒のスーツを纏い、肩すれすれにまで伸ばされた髪は、毛先の方が思い思いの方向へ跳ねている。

窓の外では霞んだ空の下、春一番がこれでもか、と言わんばかりに強く吹いていた。彼は徐に窓を開け、枠に寄りかかって中空を睨む。

「御機嫌は如何で」

話し掛けているのは、無人の空間。しかし、何処からか女性らしき声が返ってきた。

「んもう、良い訳がないじゃ無い。折角春を連れて来てやったのに」
何時の間にか窓の外には明らかに此処にはそぐわない、中華風の女性が佇んでいる。肩に、小さな好々爺を乗せて
。

「唖々、お久しぶりです」
其れに気づいた黒スーツは軽く頭を下げ、小さな老人に手を伸ばした。女性は老人を手渡すと、私はもう帰るわね、と消えてしまった。

「今年はどうお過ごしで」
彼の掌で好々爺はほっほっほ、と笑う。
「嬢に此処迄連れて来てもらったが…ちと早う来過ぎたのう。これからはのんびりと一人旅でもしようかの」
そりゃあ彼女は一所にじっとしていられる性分では無いでしょうから、と黒スーツは口許を緩ませた。

「式でもお貸ししましょうか」
途端、部屋の中から心地良い風と共に一枚の紙が舞い上がって、彼の、老人がいない方の手に収まった。
「鴉では忍び無い。鶯は如何でしょう」
彼の掌の中で、その紙は形を変えてゆく。

「此にお乗りになれば」

鶯の形になった其れは、気持ち良さそうに一声鳴いた。まだ春には遠い鳴き声で。彼を撫でながら、老人は嬉しそうにほっほっほ、と笑った。

「有難う、陰陽師よ。御礼に良い物を見せてやろう」

好々爺は徐に、持っていた小さな籠に手を突っ込んだ。ふわり、と彼の手から解き放たれた白い粉ー恐らく灰だろうーが空を舞う。

「枯木に花を咲かしょうぞ」

好々爺がそう叫ぶと、其の灰はぱっと花開き、辺り一面に白い花が咲き誇った。はらはら、はらはら。其れはまるで梅の様に、桜の様に。しかし、其の花は夢、幻。常人には決して見る事のできない、春の訪れ。満足気に微笑む好々爺だってそう。彼は世界を旅する春の精。常人には見る事など出来やしない。

?

「ヒトの子よ、此処の土地神にも伝えておくれ。今年はちと早いが…春が来おったと！」

分かりました、とスーツがにっこりと笑うと、春を告げる小さな好々爺は鶯に乗ったままふわりと消えて行った。

「私は何時から人なんでしたっけ」

そう言って、眉をハの字にする彼の名は、藤堂素也。職業は小さな喫茶店の店長にして、しがない田舎の陰陽師。

ただし、其れは今だけのこと。

第弐話　金色の狐

「ふぁ、あ」

初夏の陽気に思わず欠伸が漏れる。

今日は丁度ゴールデンウィークも中日、5月2日。数日分のテレビ欄が書かれた別冊子を隅へ追いやって、藤堂は涙目を擦りながら新聞を開いた。

今日付けの朝刊は、連休前なのか至る所に一面広告がある所為で多少分厚くなっている。彼は最後の頁を開き、とある記事に目を止めた。

（ほう…近い、な）

藤堂は何故か自嘲するかの様に鼻で笑う。何か…これから関わりそうな予感がする。

（まあ、良いニュースでは無いのだけれど）

彼はその記事を千切り取ってそのまま胸のポケットに押し込んだ。

その予感が当たっていた事を知るのは、その日の昼下がりのこと。

◇

「すみません」

からん、とベルが鳴り、薄暗い店内に一筋の光が差す。彼女は一歩中へと入ると、慎重に店内を見回した。

喫茶店の癖に人っ子一人見当たらない店内には、静かにピアノの音だけが流れている。カウンターですらただ雑然とサイフォンやコーヒーミルが置かれているのみで、人の気配はない。

（表にはちゃんと営業中って札が掛かってたよね…）

其れ位心配になる程。

「いらっしゃいませ、何のご用件でしょうか」

だから、いきなり側で聞こえた声に驚くのは当然のことだろう。

案の定、彼女はひっ、と短い悲鳴を上げてそのまま一歩後退った。

些か喫茶店には似つかわしくない営業文句を並べる彼は、困ったように笑う。

「驚かせてしまってすみません。そんなつもりは全くありませんでしたから」

彼は頭の天辺から足の爪先まで黒の衣装に身を包み、多少ツリ気味の其の黒の双眸の奥では、当人には不釣合いな金がちらりと輝く。

彼はそんな目をす、と細めた。

「ようこそ、朧月夜へ。私は店長の藤堂と申します」

彼女は、名を阪口萌香と名乗った。

彼女曰く、ここ最近ー丁度市内で玉突き事故が起きたあたりーから、彼女の彼氏の容体、特に精神状態が良くないらしい。

「…それが、病院に行っても何の悪いところも見つからなくて。どうしよう、って時に知り合いの男の子に『それはたぶんツキモノの一種だから、そういう人に見てもらえ』と言われて来たんです」

そうですか、と藤堂は微笑むと、阪口に彼の写真を求めた。阪口は予め知っていたのだろう、何の驚きも見せずに写真を差し出した。

「…成程、これは確かに憑き物でしょう」

店主は軽く目を瞑り、その手を写真のに宛がいながら、そう呟いた。

「なら、払ってあげてください。お願いします」

と客は懇願するが然し、何故か藤堂は怪訝な顔をする。

「ただ、余り此処から悪念は感じません。寧ろ、守っているのかも知れない。…本当に、払ってしまっても良いんですね？其れが、例え良いモノであっても」

阪口萌香は何も言わずに頷いた。

藤堂はふと中空を仰ぐ。珈琲の薫りに混じって、微かに香の匂いがした。

「…判りました。其処まで仰るのならば、承りましょう」

貴女を殺す(おくる)事になっても。

全てを察したかの様に藤堂は冷たい笑みを見せる。彼は最後のひとことを飲み込んだっきり、ついぞ言う事はなかった。

そんな店主に気圧されてか、客はごくり、と唾を飲んだ。

「では、始めましょうか」

店主はそう言い、居住まいを正す。其れに釣られてか、阪口も椅子に座り直した。

「結論から言いましょう。原因は貴女にある、と」

「…大変申し上げにくいのですが、貴女は、もう既に死んでしまっているんです」

◇

「狐の情はヒトの其れより細やかと言いますけれど、」

ふうわりと、黄昏の風が藤堂の髪を揺らす。其処から覗くのは、夕陽よりも更に輝く黄金の双眸。

結局、阪口萌香は自分の死を受け入れたのだ。彼女は此れ以上彼の迷惑にはなれませんよ、と切なく笑い、溶けていく様に消えていった。そんな客を見ていた藤堂は、それを思い出すと何とも言い難い気持ちになって、手に持っていた新聞紙をぐしゃり、と握り潰す。

『?原インターチェンジ玉突き事故、最後の重体者、死亡』
そこには、先月２５日に市内守形町?原インターチェンジにて起こった玉突き事故の最後の重体者である阪口萌香が亡くなった、と小さく書かれていた。因みに、葬儀場は市内神影町三丁目は際念寺、丁度店の隣の寺である。

「誰にだって恋慕程、心苦しいものなど無いのかも識れませんね」

そう呟く彼の声は何故かひどく淋しそうで、其れは静かに流れる刻のなかにゆるりと溶けていった。

其の店は、とある学園都市の寂れた商店街の、其のまた寂れた路地裏にひっそりと建っている。ようこそ、朧月夜へ。ご用件は如何でしょうか。喫茶店とは表の顔、本業ならば憑き物落とし。依頼さえ有れば、何でも落として見せましょう。

但し、其れが幸か否かは貴方次第。

第参話　凸凹コンビと赫色の風

「は、や、く！起きなさいよー！」

5月半ば。ゴールデンウィークも明け、この時期特有の心身虚脱性症候群に陥りそうになっていた、いや寧ろもう既に罹患していた市野原哉灯は、襖越しに聞こえてくる二軒隣の幼馴染の怒声で目を覚ました。

「んあ？」

「『んあ？』じゃないッ！遅刻するわよ！私が！」

彼の幼馴染、辻北御拠は襖をバーン！と、壊さんばかりに勢い良く開ける。寝惚け眼の哉灯にとり、その姿はさながら修羅の様に見えた。それはそれは、その額から生える角が幻視出来るほど。

「ほらッ！早く着替える！」

「うぇ？あぁ…」

何処から入って来たのか、それ以前に何故入って来るのかを聞くか聞かないかのうちに、哉灯は蒲団ごと身包みーギリギリでパンツは死守したーを剥がされていた。そして、彼は息つく暇も無く着せ替え人形の如くTシャツとジーンズの中に押し込まれる。幼馴染の一連の動作は見事な程に迷いが無く、妙なまでに美しかった。

…うん、何故御拠が俺の着替えの場所を知っているかは聞かないでおこう。

尤も、当の本人は周りの状況に寝起き頭の処理速度が追いつかないらしく、微妙に見当違いなことを考えていたのだが。

◇

「あー、やっぱ車は楽でイイわ」

「それが目的かよ…」

大学へ向かう、信号待ちの車の中、哉灯は幼馴染の言動に思いっきり頭をハンドルに擦り付けた。…貧血でも寝不足でも無いのに頭痛が痛い。

あるぇ？おっかしーなァ。昨日の晩はレバニラ食ってサッサと寝たんだよなァ、俺。

「あっったり前じゃない」

軽く現実逃避している幼馴染を横目に、御拠は粒ガムを口に放り込んだ。

因みに、彼等の家から神山大までは１０？程度距離がある。何だかんだで少し遠い。そして悲しいかな、？原市は分類するなら田舎。つまり、バスなどといった公共交通機関が一寸足りないのだ。というか、何故か神影商店街界隈から神山大方面へ向かうバスは一本も無い。

ならばどうやって彼等が通学しているかというと、哉灯は自転車、御拠は原付。しかし、昨日は幸か不幸か日暮れ辺りから土砂降りの雨が降った為、それまでに帰っていた哉灯は兎も角、サークルで遅くなった御拠は車で来ていた友人に送ってもらっていたのだ。

と、いうことは。

「だぁら、原チャは学校に置きっ放しなの！いい？」

…何が良くて何が悪いのか一切謎だが、詰りはそういう事である。朝からハイテンションな御拠とは対称的な哉灯は、一つ溜息を吐いた。

因みに彼、今日は2時限目始まりの為、もう少しゆっくり寝た後自転車で家を出てもちゃんと授業には間に合うのだ。南無。

◇

赤塚浬。

辻北御拠の専らの関心事といえばこれである。彼は学内ではちょっとした有名人であり、名前だけなら知らない人など居ないのだ。しかし、不思議な事に誰も彼の顔を知らない。詰り、何処の誰も彼の事は噂でしか知らないのだ。

そして、噂には尾鰭が付き物である。彼とて例外ではない。

そういったゴシップ的な話題が好きな御拠でさえ呆れる程、赤塚浬

の噂には立派な尾鰭が付いていた。例えば彼が学園理事長の息子、だとか、高校は海外に留学していた、とか。

芸能プロダクションからのスカウトを蹴ったらしい、というものまである。

とは言っても赤塚浬は得体の知れない人物であるのに間違いはないのだ　。学内に彼の友人は一人も居ないし、彼の声を聞いた人すら居ない。情報通の御拠でさえ、彼が昼時に食堂に現れた、などという話など聞いたこともないのだ。

「やっぱ都市伝説とかじゃねぇの」

学校帰りの車の中で、哉燈は半ば呆れたように呟いた。あの後、普通に2時限目から授業を受けた後、帰り際に偶々同じ頃合に授業が終わったらしい御拠に捕まり、何故か彼女の一存で彼女の原付バイクを後ろに乗せさせられ、ついでに運転までさせられているのだ。

「んー、でもさ…」

真ん中の座席に寝そべる御拠は、恋の予感とかしない？と言いかけて口を噤む。哉燈の眉がぴくりと動いたのをサイドミラーから見ていたからだ。

ところで御拠と哉燈の仲は、とても、などという有り体な言葉では表せない程良い。然し恋愛感情にはお互い結び付いていないようで、哉燈の車に乗る時は後部座席ないし、真ん中の列が御拠の指定席になっている。

言うなれば、限りなく恋人に近い、友達以上恋人未満。一時期同級

生に茶化されたりもしたが、今は昔の話、進みも退きもしない2人の間柄にいい加減飽きたのだろう、もう誰も何も言わなくなっている。

「俺は、赤塚浬って奴自身はかなり迷惑してると思う」

赤信号に捕まっている間、ハンドルにもたれ掛かる癖のある哉燈は詰まらなさそうにそう呟く。

「そりゃそうだろうけど…」

御拠は何故かオトコとオンナの違いを痛感した。

2人がそんな話をしていた丁度その頃。

彼らよりも少し早く、矢張り同じ商店街界隈に向かう一台のスクーターがあった。

（確か、この辺なんだがなぁ…）

運転手はスクーターから降り、人気のない裏通りを見渡した。ヘルメットではっきりとは見えないが、彼は茶色の髪に黒縁の眼鏡を掛けている。背格好は有り体に言えば、よく居る普通の大学生。

ちらほら通る通行人の誰も、彼を気には止めなかった。

「あ、此処かね」

彼は目的の店を見付けたらしい。いそいそと店に近付き、其の扉を開く。アンティークと珈琲の店、朧月夜。からん、とベルが鳴り、店は客が何者かを知っているかのように彼を招き入れた。

◇

藤堂の最近の日課と言えば、洋菓子を作ることである。別に食べるつもりも無いのだが、無性に手を動かしたいときに丁度良い。

同じ様な材料でこんなにも違うモノを創り出す人間というのは、つくづく不思議な生き物だ、と藤堂は泡立て器を握り締めながら思う。何時の間にか、ボールの中にはスポンジケーキのたねが出来上がっていた。

丁度其の時。

ーからん。

店の扉が開く音。もう既に藤堂の姿は其の部屋の何処にも無かった。

◇

「来ちゃったんだけど、」

赤塚浬、と名乗ったバイト志望の青年は、徐に帽子だとか色々な物

を外し始めた。藤堂にバイトを雇う気は無いのだが、其れとは別に彼の申し出を断れない事情がある。

黒い帽子に黒い眼鏡、茶髪のウイッグにカラーコンタクトレンズ。何時の間にか、店のカウンターの前には赤塚浬の荷物がごちゃごちゃに積まれていた。

そして。

カウンターの前で、藤堂と対峙する様に座る彼の姿は、最早ありふれた大学生のものでは無かった。人間の色素では有り得ない、燃えるような赫の髪と瞳をもち、何処か神々しい雰囲気を漂わせている。

其れも其の筈。何故なら…

彼もまた、ヒトでは無いから。

我々にだって、言葉に出来ぬ程不思議な縁が有るのだ。何とも面白い。赤塚浬を帰してから、藤堂は店の片隅でそんな事を思う。部屋にはケーキを焼く甘い香りが漂っている。

藤堂は其の日、赤塚に二つ返事で採用を言い渡したのだった。

第肆話　辻北さんちの付喪神（前書き）

毎週更新している訳では無いんですが、
来週は一身上の都合（テスト）により
更新はありません。ご承知下さい。

第肆話　辻北さんちの付喪神

「あーも、煩い！」

つくづくこんな体質は嫌な物だと思う、丑三つ時の深夜2時。古道具専門店、辻喜多道具店の一人娘、辻北御拠は裏の蔵の騒々しさに目を覚ました。明日の講義中に居眠りするなど、心の底から御免だ、というのに。

わいわい、がやがや。何を話しているのかはさておき、何かを夢中で話しているのは判る。

彼女はがさつに蒲団を跳ね除け、薄手のカーディガンを羽織ると、足音を立てない様にそっと母屋から抜け出した。

◇

誰もいない筈の蔵の中。

「聞いたか？」

真っ暗な其処に誰かの声響き渡る。

「何をだ？」

それに返すのは、また他の声。

「蔵のモンの幾つかに買い手が付いたんだってよ」

どうやら何人かー言葉を話す存在を人、と数えるのならーが話しているらしい。その質問にはまた別の声が答える。

「何処にかしら？」

別の所でまた声が上がる。

「さァ…何処とまでは聞けんかった。ただ、洋物が欲しいとかなんとやら」

「俺もか？」

「莫迦か、御前は。対のカップもないソーサーなんて、なかなか売れるわけがあるまいに」

「あんだと！」

「事実を述べたまでじゃあないか」

「蓋の無ェ水注になんざ、言われたか無ぇよ！」

蔵の前に仁王立ちになった御拠の耳に、そんな会話が聞こえてくる。どうも、”道具達”が自分が売れるか売れないかで喧嘩をしているらしい。

（何バカなことを…）

御拠は思わず頭を抱えた。

どうせ、この声は自分にしか聞こえないのだ。彼女は蔵の扉に手を掛ける。奴らに先ずは何て言葉を浴びせようかしら、などと思いながら。

一息付いて、御拠は蔵の扉を開け放った。

「もうちょっと静かな声で話しなさいよ！煩くて寝れ無いじゃないの」

近所迷惑にならない程度の大きさの声で、御拠は叫ぶ。途端に、蔵の中は水を打った様に静かになった。

然し、其の中には御拠以外にヒトはない。静かになった代わりにか、棚に積まれた茶碗か何かがかちゃかちゃと音を立てた。

「次、煩くしたら質屋に出してやるんだから」

御拠は口許を吊り上げ、誰も居ない筈の空間に向かって止めの一言を放つ。何処からか、えー、という反論の声が聞こえたの何て気にしない。

というより、本来ならば聞こえてはならないのだ。物の化身、付喪神の声など。

そう。彼女、辻北御拠は物の声が聞こえるのである。其れが良い事なのか、悪い事なのかは判らないが、家業柄、有って不便な力ではない。

ただ御拠自身、夜に煩過ぎて寝れないのは嫌だ、とは思うのだが。

「ま、仕方無いっちゃ仕方無いか」

男勝りな性格もあってか、殆どそれは諦めに近い。

◇

「嗚呼、付喪達ですか」

ちょうど其の頃、また別の処で月明かりに照らされている影がひとつ。其れは目を細め、楽しそうな笑みを浮かべた。

月光に照らされ、其の髪は銀に輝く。細めた目から漏れ出る光もまた銀。大凡ヒトらしくない其の色は、彼に矢張りヒトではない雰囲気を纏わせていた。

四本の尾が彼の背でゆらりと揺れる。それは善狐、それもまた、より神に近い存在である天狐の象徴。

「何だ、お前そんなところにいたのか」

どうやら此処は何処かの屋上らしい。其処につながるドアを開け、誰かが彼に声を掛けた。

「唖々、誰かと思いましたよ」

彼は声の主を見遣り、すっと目を細める。彼に声を掛けた男は顔がほんのり赤く染まっている。どうやら何処かで一杯やってきたらしい。

「その口調、気持悪りィ。らしくないから直せ。乾玄也」

男は彼の側まで来てドカッと腰を下ろした。喋り乍ら、持っていたコンビニ袋を漁っている。

「はいはい、わーかりましたよ、青井センセ」

乾は青井が何をやりたいのかが判ったのか、その場にそっと腰を下ろした。

「どうせ店の隣の古道具屋だろう」

数分後、青井が安めのカップ酒を煽る隣で乾が助六を頬張る光景が其処にはあった。

「ええ、辻喜多のね」

乾は青井の言葉におざなりに返事をし乍ら巻き寿司を解体している。何時の間にか尻尾は仕舞い込まれていた。

「次代は敏感って訳か」

「そりゃ豊作で」

「寺の方も、だろう」

「見えはしないそうだけれど？」

「人間にしちゃァ僥倖」

「まあ…そうか。でも今後が楽しみ。でしょ？」

「そんな所だァな」

青井はカップ酒を飲み干す。空のカップを袋に入れるついでに缶ビールを二本取り出し、片方を乾へよこした。

「ま、良いんだか悪りィんだか、二人とも神山（ココ）大だろう？」

青井はプシュ、と缶のプルタブを開け中の物を一気に喉に流し込む。夜風はまだ冷たいが、それでも冷えたビールは心地良い。

「しかも片方は担当でしょーに、青井助教？」

隣の乾も同じ様にビールを啜った。

「お前の後輩だ。しかも、浬の同級」

「そりゃいーじゃない、観察できるって意味でね」

「そうさな」

青井は両手を頭の方へやって、そのまま地面に寝転がる。丁度、下弦の頃合の月が辺りを照らしていた。

「ってか、涼、僕の稲荷ひとつ食べたでしょ」

「さァ？知らんな」

第伍話　Le　caf?　"nuit　d'une　lune　br

直訳すると、喫茶店”霧の深い月の夜”。
…あるぇ？

そしてまたすみませんが、修学旅行に行くので来週の更新も有りません。ご容赦下さい。
では、邂逅話をどぞ。

第伍話　Le caf? "nuit d'une lune b

6月の梅雨真っ盛りのある日。

「ねぇちょっと、御拠。聞いた？」

「…何よ」

ずっと降り続けている雨の所為か、この頃調子が悪いーー幼馴染曰く、梅雨バテと呼ぶらしいーー御拠はゲッソリした顔で思わず級友を睨んだ。

苦しいんだから放っといて！などと考えている辺り、相当機嫌が悪い様である。しかし、級友はそんな御拠の状態を気付いてか気付いてないのか、御拠の疑問に「さあ、何でしょうねぇ」と勿体ぶって答えずにニヤニヤと笑っている。どうも、何か答えないと先に進まないらしい。

「…哲学のジジイが死んだ」

取り敢えず、御拠はこの学園で死にそうにないランキング一位の、哲学科の名物爺さんを亡き者にした。

「違いまーす」

まあ普通に考えてそうだろうが、やっぱり違うらしい。んー、と唸って、御拠は机に突っ伏した。未だに級友はニヤニヤと笑っている。このままの状態が続けば、ネタが尽きる前に御拠のヒットポイント

が尽きそうだ。

「……」

現に、御拠はもう瀕死レベルらしい。脳の隅の方で、ピコンピコンとお決まりの警告音が鳴り響いている。

「…早く教えなさいよ」

暫くの沈黙の後、痺れを切らした御拠は突っ伏したまま唸る様に声を出した。

「あのね、赤塚浬の目撃情報が入ったの」

「…はい？」

一瞬で頭痛が吹っ飛んだ。

◇

「…で、何処に居たって？」

ぢゅー、と友人に買わせたミルクティーをストローで啜り乍ら、幾らか回復した御拠はペンをカリカリと走らせる。それはそれは、何処かの新聞記者さながら、いや確実に彼女の幼馴染ならそう指摘す

るだろう。それ程見事に様になっている。

「えーと、彼、喫茶店でバイトしてるらしいのよ。市内にあるらしいんだけど、私の知らない店だった。知ってる？喫茶『朧月夜』って」

お、ぼ、ろ、づ、く、よ。御拠はそのフレーズを幾度か頭の中で反芻した。

あれ？何処かで聞いたことが無い様な…ある様な？

「って、はぁ？あの店？」

御拠は思わず飲んでいたミルクティーを吹き出しそうになった。彼処だ。彼処に違いない。だって、雰囲気が胡散臭いし。

「アンタ、知ってんの？」

「知ってるも何も、ウチの隣よ」

「どんな店？」

「え、そりゃ…」

「？」

「…って、営業…してたっけ？」

そう言えば、お客さんが入ってるところを見たことが無い様な気がするのだけれど…。

一つ、物凄く大きな懸案事項である。

◇

「と、いう訳で哉灯。行くわよ」

その日の昼下がり。雨はぎりぎりで上がってはいたが、まだどんよりとした雲が空を埋め尽くしている。彼等は丁度彼等の家と家の間、詰り辻喜多道具店と神影際念寺に挟まれたある建物の前にいた。

「何処に？と言うか何故俺を誘うか」

そんな空と同じ位どんよりとした気分の哉灯はやれやれ、と言う風に頭を振った。御拠の方は何時もの如く、反論は許さないとでも言うかの様に仁王立ちになって、頭一つ分高い哉灯を見上げている。

「…ヒマそうで、可哀想だったから」

……何を。哉灯の頭の中で、ピキッという何かが割れた様な音が響いた。

「そーか、そーですか。良うござんしたねェ、どーせ俺はヒマで可哀想で寂しい男ですよ」

目から汗がダダ漏れである。

「卑屈になっちゃダメよ」

「テメーが言ったんだろうが！」

因みに、コレが学園名物の夫婦漫才であったりする。

「…で、何処に行くんだ？」

暫く現実逃避していた哉灯は、やっとの思いで現実に戻って来るなり怪訝そうな顔をしてもう一度当初の質問をした。

「此処よ」

それに間髪入れずに御拠が答える。

「…此処？」

すぐ脇の建物を見上げ、哉灯は眉間に皺を寄せた。本気か？この幼馴染は。

「そう！この営業してるかどうか、繁盛してるかどうか、外から見てもぜーんぜん判んない雰囲気胡散臭目のこの店『朧月夜』よ！」

どどーん、と、御拠は何やら勢いのありそうなものが幻視出来そうな位にまで堂々と（無い）胸を張った。

「ほーお、そういう風に見えているのか、この店は。ま、言う通り客が来ないから居心地が良いんだけどな」

しかし、その自信は直ぐに萎える事となる。

「ひゃ？アンタ誰？」

少々ヤル気の無さそうな目に銀縁眼鏡を掛けた男がニヤリと笑っていたのだ。

「誰も何も、客だ。この店の」

銀縁眼鏡は御拠の問いに、フン、と鼻で笑い乍ら至極真っ当でその割には的を得ない事を言ってのけた。

「ホラぁ、言わんこっちゃない。明らかに不審者ですよ、僕ら」

変な空気に気まずくなったのか、彼の連れだろう気弱そうな青年がバシバシと彼の背を叩く。

「気にすんなって」

が、彼には然程大した事では無いようだ。

「いやいやいや！僕まで不審者扱いとか、泣いても嫌ですから！」

「良い年こいたヤローが泣くのは俺だって勘弁だ」

「そーゆうイミじゃなくって！」

…どうやら彼等は彼等で大変らしい。

「…あの人達、いつから居た？」

彼等の漫才に暫く惚けて居た御拠は、近くで空気になっていた哉灯に尋ねる。

「え？始めから居たけど」

因みに彼、空気マイスター2級（自称）持ちである。つまり彼、空気を読むことと空気になることが尋常じゃなく上手い。

「…早く…教えなさいよ……」

御拠は怒りを通り越して呆れてしまった。

◇

からん、とベルが鳴り、薄暗い店に一筋の光が差す。御拠はごくん、と唾を飲み込んだ。しかし、店の中から誰かがそれに応対する気配は無い。

「オイ、起きろよ」

正直に言うと、その日の朧月夜は営業しているとはお世辞にも言えない状況だった。と言うのも、店主は奥の小部屋に引っ込んでるわ、たった1人のバイト店員は客に用意してある筈のソファの上で、漫画雑誌を顔に被せて昼寝をしていたのだから。御拠の後ろから入ってきた銀縁眼鏡は馴れた調子でバイト店員を叩き起こした。

「…青井さぁん、もちっと優しく起こしてくれませんかねェ」

バイト店員は眠そうに目を擦る。口の脇にヨダレの跡があるのはご愛嬌だ。

「って、うぇ？お客？」

「そうらしい」

一瞬、妙な沈黙が店中を支配した。あまりの事に、バイト店員の脳処理がストップしてしまったらしい。

「…ありゃま、ビックリ。うわー、俺恥ずかしー。…んまあ、ならシロ呼んで来るわ」

バイト君、再起動。彼はあたふたとキッチンに引っ込んでゆく。青井、と呼ばれた銀縁眼鏡はそれを見送ると、さっきまで彼が占拠していたソファにドッカリと腰を下ろした。連れの青年もオロオロしながらその近くの椅子に座る。御拠と哉灯は彼等に促される様に、対岸にあったソファに二人して腰掛けた。

「で、何で来た？傍目営業してる様に見えないからか？」

青井は肘を膝の上に立て、手を組んで
その上に顎を乗せ、気怠そうに御拠達を見据える。その隣では彼の連れがどこから取り出したのか、缶コーヒーを飲んでいた。営業しているかいないかは置いておいても、ここは一応喫茶店である。然し、彼はさも当然の様にコーヒーを啜っているのだ。…もしかしたら、実はこの中で一番図太いのかもしれない。

「…まあ、そうですけど…」

妙に迫り来る青井に、御拠はしどろもどろに答えた。隣では何故か、哉灯が「あの御拠様が恐縮しちゃってるよ…ははは」と現実から飛び発っている。本当に大丈夫なのだろうか、コイツは。

「だってよ！聞いたか、シロ」

其れを聞いた青井は店の奥に向かってそう叫んだ。店の奥からは、さっきからカチャカチャという音が響いている。

「聞いてますよ…ったく、一応これでもなんとかやってはいけてるんですけどねえ…」

暫くして、奥のキッチンからどうも店長らしき男が、上に人数分のグラスの乗った盆を持ってやって来た。黒いスーツに、少し長めの髪を後ろに束ねている。どうやらグラスの中にはコーヒーが注がれているらしい。

「涼さん、リクエスト通り水出しコーヒー用意しましたよ」

そう言うと、彼は一人一人の前にコースターを並べ丁寧にグラスを置いていく。御拠は一言礼を言い、差し出されたコーヒーに口を付けてフリーズした。あれ？青井？涼？どこかで聞いた様な…？

「お、ありがーー」

「って！青井涼遥助教？…ですか？」

思わず御拠は立ち上がると、そのまま前のめりになって青井の顔を覗き込む。

「あ、ああ、そうだが？」

「じゃ、お隣は…」

「コイツは乾玄也」

「はじめましてー」

乾はのほほんと笑って軽く頭を下げた。

「…は？わ、あわわ、私は辻北御拠って申します！しゃ、社会学部2年です！え、えと、あの青井助教と万年学生で有名な乾先輩で間違い無いんですよね？」

思わぬ邂逅にテンパる御拠。

「僕、それで有名って…」

乾は御拠のその言葉を聞いて、ガックリと肩を落とす。可哀想に、その背中は何となく煤けて見えた。

「ああ、隣の道具屋のね…そっちは？」

青井は顎をさすりながら、哉灯に尋ねる。

「あ、俺はそこの際念寺の市野原哉灯です」

「じゃあ両方ともお隣さんってワケか。なら挨拶しとかないとね」

そう言うと、店長は居住まいを正して御拠達と向き合う様に座り直した。

「私が店長の藤堂素也と申します。どうぞ御贔屓に」

と言い終えた彼は、後ろを振り向いて恐らくキッチン辺りにいるであろうバイト店員を探す。

「で、あっちのバイト君は…」

今まで忘れていたが、御拠のこの店に来た本来の目的は、この店でバイトしているらしい赤塚浬の捜索である。コーヒーを飲んでいた全員がバイト店員の方に顔を向けた。

「あん？俺か？赤塚浬だけんど？」

どうも、あの情報は正しかったらしい。何時の間にかまた別のソファに寝転がっていた彼は、のそりと起き上がってこちらを見ている。御拠はまじまじとその顔を覗き込んだ。

顔は…だいたい中の上から上の下ぐらい。

…中々良いじゃないの。

さっきまで引っ込んでいた御拠のオトコマエセンサーがきゅぴーんと反応した。コレは案外良い物件かもしれない。

「え？何、アイドルみたいな自己紹介をご所望？」

ただ、残念なことに彼は所謂クールバカである。

第伍話　Le caf? "nuit d'une lune br

「…で、どうだった？」
「いたわよ」
「どんな感じ？」
「顔は上々。でも…」
「でも？」
「…性格がねぇ、ちょっと…」

第陸話　神山赤塚、龍泉青井（前書き）

リアルが忙しくなった＋プロットすら仕上がらないでこんなに遅くなってしまいました。ごめん茄子野菜。違った、ごめんなさい。
また、作者は関西人の為、一連の放置に大震災は何ら関係はありません。

第陸話　神山赤塚、龍泉青井

「…で、何の用だ」

7月は最初の金曜のこと。その昼下がり、今日の講義が終わった赤塚浬は何時もの如く神山学園大学社会学部民俗学科研究室、つまりは青井と乾の本拠地に押し掛けて当たり前の様に茶を啜っていた。

何時の間にか青井のキャスター付きの椅子は彼に占領されている。その椅子の本来の主は部屋にあった客人用のソファにドッカリと腰を下ろし、何時も迷惑事しか持って来ない悪友をジト目で睨んでいた。今日もまた迷惑事を持って来やがったのか、と。

「やだなあ、今日は切咲の乙三に会いに来たんだけど」

赤塚はそんな青井の様子など気にもせずに椅子を前後逆にして座り、背凭れに寄り掛かって足をブラブラと揺らしている。

「ん？俺かい？」

それを少し遠くの本棚の側でコーヒーを飲みながら眺めていた切咲が此方へやって来た。

「そーそー。あ、研究室一緒だし涼にも関係はあるから、聞いてきなよ」

そう言って、赤塚はコトリとカップを机の上に置く。

「あのねえ、明日の土曜にウチの神社の宝物庫の虫干しするんだけ

どさあ、来ない？」

「へぇ」

「面倒だ」

切咲が興味深げに顎を撫でたのに対し、青井は興味無さそうにマグカップの中身を喉に流し込んだ。

「話は最後まで聞きなって。で、なんだけど、何百年か前にソコに突っ込んだ気がする箱が見つかんなくってさあー」

未だに不機嫌な青井を尻目に、赤塚は話の最中にくぁ、と欠伸をする。

「…ま、中身はただの巻物？確か、涼んとこの見取り図かなんかだった気がするのよ」

考え込んでいるのか、二人からの返事はない。赤塚は心配そうに肩を竦めた。

「ホラ、研究課題にぴったし？」

「…要はオレ等に神社の掃除を手伝え、ということか？」

軽くおちゃらけた赤塚の態度に、更に不機嫌モードが加速する青井。

「んまぁ、涼さん、人聞きの悪いこと言っちゃってぇ。ま、でも？何か重要なモノが出てくるかもしれないじゃない」

然し赤塚は、こんな時でも青井へのおちょくりは忘れなかった。寧ろ機嫌が悪い時ほどきちんとやる。流石は赤塚さんクオリティ。

それに対し青井の返事は機嫌のわりに意外な物だった。

「ま、確かに一理あるわな。お前、よく俺ん所の宝物掻っ攫ってくとか莫迦なことやってたし、それが残ってるかもしんねェ」

…全く、ツンデレも良いところである。

「ホラ乗ったぁ！」

「まだ行くとは決めてねぇだろ、教授が」

「ちぇっ、釣れないねェ」

再びツンモードにはいった青井を、赤塚はニヤニヤ顔で見つめていた。

「学生は連れてっても大丈夫かい？」

暫くして、それまでの微妙な沈黙を破る様に、さっきまで黙っていた切咲がこう切り出した。

「お、前向きなご意見さね。俺ぁあのツンデレ壮年よりはそーゆう乙三の方がよっぽど好みだわ」

ツンデレ壮年とは勿論、青井のことである。

「そりゃ重畳」

切咲はくすりと笑うと、マグカップに視線を落とした。

「誰がツンデレ壮年だ」

そして、勿論青井は赤塚の言葉に噛み付いた。因みに壮年期とは３０代から６０代あたりのことを指す。青井涼遥は自称３５歳。何も間違っちゃあいない。

「あっこで吠えてんのは無視して、えー、そっちの研究室って何人？」

「１０人も居ないね」

ふーん、と赤塚は視線を泳がせる。彼曰く、蔵の床部分が大分脆くなっており、人数が多過ぎると床が抜けるかもしれないのだとか。

「ま、その人数だったらイケるか」

中身を出す場所も近いしね、と赤塚は頷いた。

「それじゃあ、参加させてもらおうかな」

「んじゃシロに連絡しときまっさぁ」

☆☆☆

日付変わって、土曜日の午前中。赤塚浬は神上山の麓にある、赤塚

神社の境内で楽しそうに辺りを見回した。彼はどこから持って来たのか、黄色いビールケースの上に立っている。

「さあて、皆さんよーこそ、赤塚じん…ぐぇっ！」

しかしまあ、何故か妙にノリノリである。青井はそんな赤塚の首根っこを掴み、無理矢理台の上から引き摺り下ろした。

「そんな御託はどーでも良い。で、宝物庫とやらは何処にあるんだ？さっさと教えろ」

「すず…いや、青井助教！調査協力者を殺すのはマズいですって！」

朝の清々しい空気に満ちた境内のなか、乾のツッコミが響き渡る。あと一歩で昇天しそうな位真っ青な顔をした浬は、もう力が入らないのか、ずるりと青井にしなだれかかっていた。

「コイツだったら死なんだろ」

そんな彼の調子などどこ吹く風で、青井は赤塚の襟元をパッと放す。赤塚はその体勢のままどしゃり、と地面に倒れ込んだ。

「げほっごほっ、うぇぇ、青井さん、そりゃ非道い…つか、絶対アンタ知ってるでしょーに」

そして、きっかり3秒後に復活。どうもこの手のやり取りは初めてではないらしい。寧ろ往年のネタの様にも見える。

「ほら、死んでねぇだろ。で、んなモン忘れた」

「そーゆー問題じゃなくて…」

そう言いかけて、乾は口をつぐんだ。これ以上言っても無駄なのは経験から分かっているからだ。

（はあ…）

妙に自信満々な助教とそれを惚けて見ている”一般の”学生二人を脇目に、彼はちいさく溜息を吐いた。

☆☆☆

「うをっ、眩し！」

「眩しー！」

「キャー日焼けするー」

「溶けちゃう～」

（…はぁ、ここもなの…）

やる気が削がれる、とはまさにこの事を指すのだろう。準備で遅れる男共より一足先に蔵に到着した御拠はその戸を開いた瞬間、直ぐに後悔した。神社の蔵なんだから、ウチの蔵ほど煩いヤツは居ないだろうと嘗めていたのが間違いだったのだろう。

しかし実際は、境内から外れた山中に建てられた蔵の中身の方が、彼女の実家の蔵の中身よりもかなり煩かった。体感で言うならおおよそ2倍ほど、だろうか。

（でもまあ…やるっきゃないか）

御拠はふぅ、と溜息を吐く。実家のことを考えてみれば、こんなのには慣れっ子なのだ。今更どうということではない。

「お邪魔しまーす…」

彼女は一歩、じめじめとした蔵の中へ足を踏み入れた。

☆☆☆

御拠のやる気がジェットコースターの如く一気に低下していたその頃。

「全く、空でも飛べば楽なのに…」

赤塚、切咲を除いた男三人衆は各々レジャーシートを抱えて黙々と山道を歩いていた。全員そこそこ運動が出来るのか、あまり疲れは見えない。しかし、ほぼ獣道な道中、キツイものはキツイ。それは暫く無言でいた青井が溜息がちにそう呟くほど。

「へ？青井助教、どうかしたんす、か？」

そのすぐ後ろにいた哉灯は上手く聞き取れなかったのか即座に聞き返す。大きな木の根を踏み越えながら。

「い、いや、何でもないさ。鳥達は羨ましいなと思っただけで」

「はあ」

哉灯は青井のはぐらかすような返答に、納得いかないような声を上げる。しかし、こう言われるとどうしようもないので、彼はさっきの言葉を推測してみることにした。ほんの少し聞き取れたのは、空だとか飛ぶだとかそんな言葉。

（空を、飛ぶ…）

まあ確かに、この凸凹すぎる道をえっちらおっちら歩くよりは、一気に空を飛んだ方が楽そうではある。だけども。

（誰が飛べるってんだよ）

人間、空なんて飛べるわけがない。

（じゃあ…何だったんだ？）

確かにちゃんと空と聞こえたし、飛ぶとかどうとも聞こえたのだ。しかも、飛べればではない。飛べば、である。まるで飛べることが前提のような言いっぷりだ。

『山で遊びすぎちゃあイカンぞぉ、何つったって天狗が出るんだからなァ！見つかったら終いさ、お前なんかまだ小っちぇーからガブっ！って一口で喰われちまうんだ』

ふと、哉灯の脳裏に昔の父親の言葉が過る。

（…あー、天狗って空飛べたっけ？）

烏天狗だったらアレだけど、と哉灯はすこし顔を顰めて前の男の背中を見つめた。ふと漏れる微かに人でないような雰囲気。

（いやー、天狗じゃない気がする。翼では飛ばない、というか）

流石は”当たり年”。こういうオカルト事情にはかなり敏感である。

そして、彼はもう一つ父親の言葉を思い出した。

『なァ、チカ。水辺でも遊びすぎちゃあイカンぞぉ。あすこはなァ、龍神様が出るんだあ！お前なんてヒョッコ、すぐに飛んで攫われちまうさ』

ついでとばかりに、ガハハ、と笑って酒を飲むイカツイ顔の住職の姿を嫌でも幻視する。いや、別に嫌いなわけじゃないけどさ。

（龍神？龍ねぇ。翼は無いけど飛べるよなぁ…）

そんなことは捨て置いて、哉灯はさらに思考に耽る。元々人間じゃない何かを感じ取ることは出来るからオカルトとは馴染みがあるし、思考がこっち方面に傾くのも変ではない。ついこの間も、明らかに意識不明の重体に陥っているはずの遠い知り合い（たぶん生き霊だろう）に恋愛相談を持ちかけられたくらいである。まあ勿論、彼が解決できるような案件ではなかったので、適当に理由を付けてすぐに（父親曰く）お隣にいるらしい本職を紹介したのだが。

それは兎も角。

何となくではあるが、始めて会話した時から哉灯は、青井が、いや彼だけでなく赤塚や藤堂、乾までもがヒトではないのではないか、と感じていたのだ。

（青井さんが龍神？…まさかぁ）

哉灯はもう一度青井の背中を見遣る。ついでに木々の先に小さく開けた場所があるのを見つけた。目的地はもうすぐだ。

（いや、でも変じゃあ…ないよな…。どうしよう）

肝心の当人はまだ考えていたが。

☆☆☆

「で、結局年増含め学生三人って、どういう了見だァ、乙三？」

赤塚が全員解散号令を出したしばらく後。さっきと同じ、しかし少々ドスの効いた声がやはりさっきと同じ場所に響いた。ついでに、おまけとばかりにかなりの怒気を含んでいる。

「ま、まあ…昨日の今日、だったからね…」

赤塚はその分楽できるかーと思ってたのに、と切咲をジト目で睨む。彼から目を反らしながら、中年の民俗学教授は苦笑いした。

（彼らがゼミ生じゃなくて、ただの知り合いの助っ人だってことなんて、言えやしないよ…）

本日集まった学生メンバー三人とは、乾はもちろん、あとは辻北御拠と市野原哉灯の二人のみである。彼等は二人とも二年生であり、

無論ゼミなどにはまだ入ってはいない。それどころか市野原は社会学部ですらないのだが、我が道を歩む赤塚さんの知ったことではないらしい。その為か彼はそれ以上何の追及もしなかった。

（…はあ）

窮地を脱した切咲は、赤塚に気付かれない様にそっと冷汗を拭った。

☆☆☆

蔵の中も、奥を残して粗方片付いた頃。

「ったく、外に出るのが嫌だとかカンだとか、ちょっとぐらい我慢してもらいたいもんよ。煩くて仕方ない」

御拠まだそうブツブツ文句を垂れていた。つまるところ、彼女の機嫌はまだ直ってはいなかったのだ。眉間に軽くシワを寄せたままの彼女は辺りを一度見回して、最奥に残っている棚から溢れた荷物を整理しようとその場に屈みこむ。

「ンァ？嬢ちゃん、もしや俺らの声が聞こえンのかい？」

どうもさっきまでの呟きはあちらにも聞こえていたらしい。御拠が上から降ってくる声の発信源を探すと、丁度蛸唐草模様の古ぼけた飯茶碗が彼女の視界に入った。

「そーそー、俺俺」

何だか軽そうな性格の茶碗である。この蔵が煩いのはこういった性格の奴等が多いからかもしれない。御拠は妙に納得してしまった。

「しっかしまぁ、おったまげた。俺らの声を聞けるのは赤塚青井の神さんだけだと思ってたからなァ」

黙々と作業を続ける御拠を他所に、飯茶碗は半ばウットリした様な状態で話を続ける。

「…神様なんて居ないでしょうに」

茶碗の言葉に引っかかることがあったのか、御拠はまたもボソリと呟いた。物の声が聞こえるというまごうことなきオカルト体質だというのに、彼女自身は割と現実主義なのである。

神様は居ない、いや居るはずがない。

しかし、

「いやいや、嬢ちゃん。それは大間違いさ」

蛸唐草はフフンと得意気に笑って御拠の言葉を否定した。

「確かに、アマテラスとかキリスト教だとかの唯一神が本当に居るかは俺も知らねェよ」

そして、彼は御拠の「ホラ、居る訳ないじゃない」という呟きを華

麗にスルーして話を続ける。

「でもなァ、赤塚青井の神さんは違ェンだ。実際にこの世に居るンだよ。現に俺なンて、赤塚の神さんが使ってた茶碗だしよ」

「はぁ」

御拠はイマイチ意味が分からないという顔で惚けた声を出した。

「信じられねェってか？ま、分からンこともねェな。俺だって、使われ始めてから１０年位は信じられなかったモンだ」

茶碗はウンウンと声だけで頷いた。その気持ち良く解ります、そんな感じで。

「でも、１０年たってもあいつァ最初に出会った時のまンまなんだぜ？そりゃァ嫌でも信じる他ねェさ」

な？と蛸唐草は楽しそうに笑う。御拠はますます意味が分かりません、という顔をした。そんな存在がいるんなら、もっと前から都市伝説とか怪談とかになっていたに違いない。『不老不死の人がいる』とか。だから。

「あー、一つ言っとくけどな、この町にゃ多いぜ？そういった存在はなァ」

そう言うと、飯茶碗はむむ、と唸ってひぃ、ふぅ、みぃと何やら数え出した。

「…赤塚青井のお付きの狐もだし、終日の現人神も良く似たヤツだ

ろ？あとは…あァ、思い出した！神宮司の初代もだ」

そして茶碗は、あー、確か昔、あいつァどっかの大学作ったらしいンだよなァ、と感慨深げにぼやく。御拠はそれを聞き流そうとして、しかしそれに失敗してフリーズした。

神宮司彩。神山大の創設者であり、神山大の人間なら誰だって知っている有名人である。御拠も、入学パンフレットに妙に恰好つけた彼の白黒写真が載っていたのを覚えている。

「ンなモンだから、みぃンな集まって知恵出し合って、カクカクシカジカでちゃあんとバレない様に隠してンだ」

どうだ、と言わんばかりの茶碗の言いっぷりに、御拠は小さく溜息を零した。相当自信があるらしい。その所為か胸などあるはず無いのに、堂々と胸を張っている様子が幻視出来た。

「…墓は？」

ただ、御拠には気になる事が一つ。

「ンァ？墓？」

「そう。ウチの大学の神道学科の奴らが毎年墓参りに行ってるんだけど」

何故神道学科オンリーなのか御拠は知らないが、割と学内でも有名な行事であったりする。

「あンなモンフェイクだろ、フェイク。実際にゃあいつァ死んじゃ

いねェ。というか、平安の手前から生きてるってのに今更死んだってのもオカシイだろ。どーせ今日もそこら辺をフラフラしてんじゃねェの」

しかし、茶碗はバカらしいとそれを一蹴にした。

「……」

御拠はもう呆れて何とも言えなかった。というか内心、『神道学科の皆さん、毎年毎年、意味無い墓参りご愁傷様です』などと思ったのは内緒だ。

「辻北さぁん、何か目ぼしいモノとかあったあ？」

そんな時、妙に間延びした声が蔵に響き渡った。赤塚だ。

「え…と、その…」

御拠は何故か焦って辺りをキョロキョロと見回す。ぶっちゃけ、奥には空の木箱くらいしか残っていないのだが。

「ちいっス、ダンナ！俺！俺がいるって！」

…訂正。蛸唐草の飯茶碗を一つ忘れていた。

その茶碗のマヌケ声に御拠は少しは空気を読めよ、と思った。が、普通なら聞こえないことを思い出したのか、諦めてちいさく溜息を吐いた。空気を読むのはヒトガタだけでいいのだ。

しかし。

「あらぁ、お前、こんなとこにいたの」

赤塚の反応は意外なものだった。

彼は御拠の頭上を越えて棚へと手を延ばし、むんずと茶碗を掴み取る。彼にも物の声が聞こえるのだろうか。

「いやー、てっきり失くしちまったと思ってたぁ」

と彼は少し懐かしそうに茶碗を眺めると、先に出てるねと言ってくるりと方向転換し蔵の外へと歩き出した。

「ダンナ、また俺を使ってくれるってか？」

「よぉし、じゃ、早速今晩から使ってやらァ」

噛み合っているのか噛み合っていないのかわからない会話もどきをしながら、赤塚浬ｗｉｔｈ蛸唐草の飯茶碗が蔵から出てゆく。御拠はそれを眺めながらしばらく惚けていた。

しかし。

（ちょっと待って…）

御拠には、またも気になることが一つ。むむ、と彼女はお得意の推理を始めた。

（アレは赤塚浬の茶碗で、アレ曰く、アレは赤塚の神様の茶碗…赤塚？）

混乱しているのか、妙な言葉遣いな気もするが、そこまで来ればその結論に辿り着くのはそう難しいことではない。

（ま、まさか…ねぇ）

彼女が真実に触れる日は、近い、かもしれない。

第陸話　神山赤塚、龍泉青井（後書き）

次のネタもない。
どうしよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7714o/

朧月夜

2011年8月11日20時07分発行